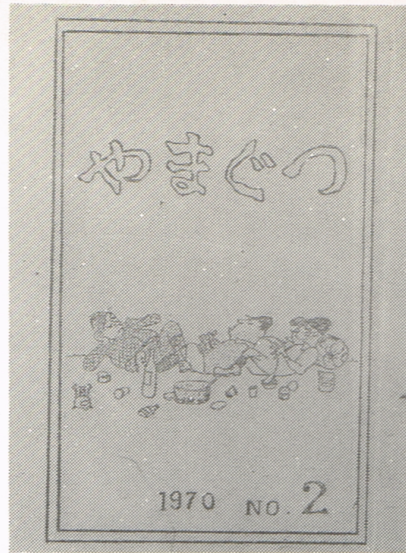


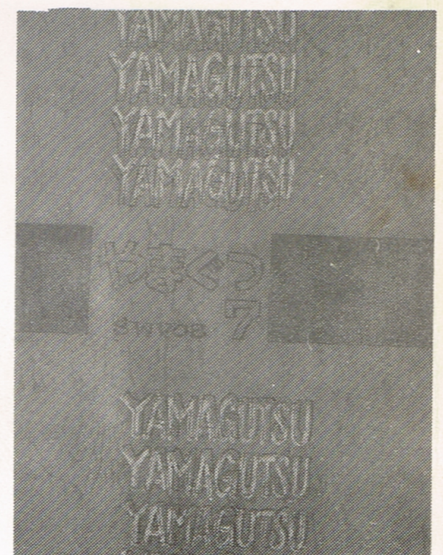
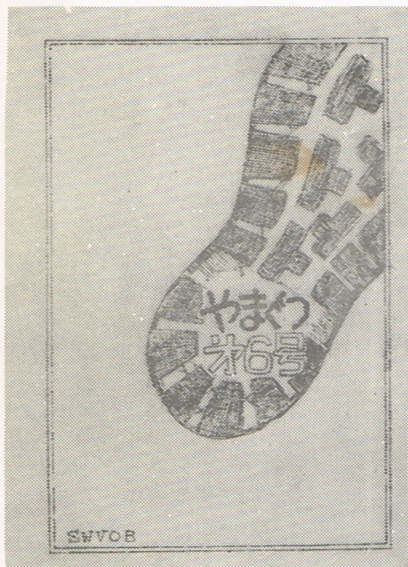
YAMAGUTSU
YAMAGUTSU
YAMAGUTSU

3 1971

SWVOB

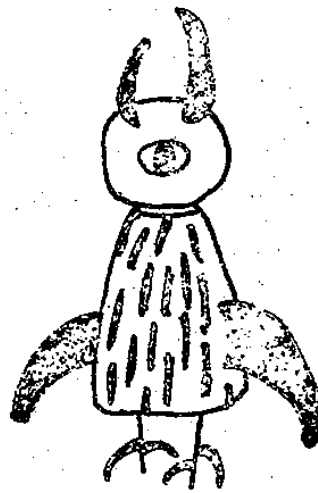


やまぐつ



創立10周年記念号
VOL. 9
S. W. V. O. B.

つぐまわ



NO. 9

創立10周年記念号

孤独な洗礼

たった一人——私曉

月明りだけを頼りに辿り着いた山舎

沈黙の屋根道——昨夜

隙間だらけのくせに、それでいて温もりのある板窓
そっと押し上げる

朝霧とともに冷気がまた寝覚めを忘れた体を
金縛りにしてしまふ

その峻厳な美しさを放棄した春の雪

人は今、この期待の無い山腹と、丸太小屋には
見向きも出来ない

今日一日はここに居て

一人孤独な洗礼を受けよう

重くのしかかる白い夢にも、一冬を耐えてきた木々が、
岩が、山の地肌が、

それを授けてくれようから

温かいコートを奪われた樵の枝よ、

温かいコートを奪われた樵の枝よ、

あなたは北風の横暴に黙って耐えるのか

悪人の、箭島どの袖を引き裂かれたというのに

それなのにあなたは、なま

なも口に出さぬとしないのですね

わがっています

知っているのですね、あなたは

驚きも感不興も、必ず笑ってきて

すばらしい。アブラノを割かせてくれることと

わがっているのです

あなたは

驚かさない教師

私達にだ、今日一日

あなたのその

真実の荒れを愛するだけでよいのです

そして明日

あけ、黙って山を降ります



やまぐつ 第9号 目次

特集

OB会この10年..... 17

寄稿 入江 義一

創立10周年を迎えるOB会の皆様へ..... 8

「やまぐつ」発刊にあたって・諏訪部信一..... 4

私とOB会との5年間 ・ 泉 篤志..... 8

わたしの山と旅 ・ 萩原 進..... 10

私のこと ・ 諏訪部信一..... 14

▶ 1977年度 行事報告 ◀

南ハケ岳冬期縦走・倉地哲朗..... 19

春合宿・奥秩父独語単語帳・垂原義範..... 22

夏合宿 ・ 江成利一..... 24

東北の山 ・ 恩田美豆房..... 26

お見見山行 その1・安藤桂伊子..... 28

その2・井上 則子..... 30

忘年会 ・ 新津正己..... 32

武尊山冬期山行 ・ 小沢 聡..... 33

スキー合宿 ・ 秋山 徹..... 35

現役100Km同行記・新津正己..... 36

守門岳 千葉典義..... 40

島海山の思い出 森田純子..... 44

現役との交歓会 青藤正雄..... 46

晩秋の北アルプス 48

浪人時代 増田義昭..... 50

晩夏の上高地 小沢・新津..... 52

雄 威 高城 亮..... 54

越後の山 56

並崎一野郎30K-河本康成..... 38

たきさんの原稿をありがたうに読んでくれたおかげで、この冊子が出来上がった。



みすの

やまぐつ九号発刊にあたって

第九期〇Ｂ会会長

諏訪部 信一

人間といふもの、何か自分が氣に入って始めた事でも、毎日続けていくことは難しいらしい。俗に言う三日坊主である。会社などへ就職しても、三日、三ヶ月、三年という。入社して三日仕事をして嫌気がさして来なければ三ヶ月はその仕事が出来る。三ヶ月を過ぎると三年、その三年も無事に過ぎると、一生その会社にいるさうである。何か人の転換期は「三」という数字と關係があるらしい。心理的なものも多いと思うが、要するに、人の行動には年月の間に、多くの転機があるようである。

〇Ｂ会も十年の月日がたった。最初にいた

人達は少れづつ退会していった。しかし、毎年多くの人達が入会して、それぞれ役割を果たし、会を少れづつ発展させて来た。さうして今年、十年がたつてしまった。会報も毎年発行され、毎号ごとに立派なものになってきている。十周年目の今年、会長の役を引き受け、自分なりに一生懸命やってきましたつもりでも、跡を見ると、まだまだと思う所が数多くあって、残念に思っています。会員の年齢差も大きくなった〇Ｂ会の中で、皆で一つの事をするとは本当に大変なことだと思えます。けれども、生老病死も違い、その反応も異なる人達が、互いに相手を認めながら協力してやうしていく事は、意義のあることと痛切に感じています。今年には役員の人、会員の人、多くの人達がそれぞれの仕事と積極的な実行してくれたので、私にとっては本当に助かったと思えます。

この十年を、そしてこの一年間を振り返ると、
 長くここまで来たものだと思ひます。三日
 坊主にはなるまいとし、三年目の中弛みも棄
 り切つて来たわけです。私が今残念に思
 う事といへば、OB会創立当時の人達が
 その活動を残しながらも、少しづつ退会して行
 った事です。私達のこの会は山岳活動を軸
 とした、一つの人間の広場なのです。その広
 場には幅の広い、いろいろな社会の人々の参
 加が必要なのです。生活の場の違いから生
 じる多くのハンディを会員相互で認め合つ
 て、一つの活動をしてゆくところに価値があ
 るのです。時は少しづつ、でも確実に過ぎ

ていきます。明日は今日よりも少しでも進
 歩している自分を見る事ができる様に。
 OB会は新しい一つの転換期を迎える時
 期にさしかかっているのかも知れません。今年
 の反省を一つの踏み台として、来年はより活
 動的な会へと、私達は自信を持って活動
 を續けて行きたいものです。会は今後、
 十年、二十年と続いて行く事と思ひます。
 しかし、より良い明日を考える事は、今を
 より充実させてゆく以外に方法は無いの
 です。会報は一年間の活動の軌跡です。
 これを有効に使つかどうかは会員一人一
 人だと思ひます。



寄稿

創立十周年を迎える会員の皆様へ



原から小田原へ転勤して六年、「何をして来たか」と言問するとき、我ながらその答えのお粗末なことに愕然とします。

職員室の窓から箱根の山々を眺めています。駒ヶ岳が、二子山が淡いシルエツトとなって夕映えの中に立ちほだり、目を左に転ずると、おだやかな海のかなたに、燦爛をかすかにあげた三原山がその姿を見せています。

相模原が順調に発展し、主税が卒業生が次々と巣立っている様子を聞き喜ばしく思っています。〇〇会も十周年ということで、今更ながら月日の経過の早さに驚くと同時に、相模

城内高校でも山岳部の顧問をしています。女子校ということ、従来は山小屋泊りであった山岳部をテントで縦走できる山岳部にしました。ラジウスの使用法、テントの設置、撤収からはじまって、相模原と同じように初歩から教えました。練習を添も女子向けに工夫しました。丹次も数多く歩き、アルプスにも連れて行きました。しかし、今こうやって考えていますと、結局は、県

あげたくなります。のんびりと自然にさから
わず、心ゆくまで楽しんで山登り、それが最近
の山になりました。やみくもに歩き廻った若
き時代のよさは良きとして、それとは別の繁
レみ方が解りはじめたような気がします。山
を征服しようとして無中であつた時代から、
率直に山に入り、山の大きさを精神的にも肉
体的にも実感として受けとめられるような気
持ちになりました。ようやく年相応になつた
のかも知れません。レカレ山への愛情は前以
上になつてゐるようです。

とりとめのない文章になり恐縮ですが、
B会の発展と会員の皆さんの
より一層のご活躍を祈つて筆
を置きます。



私とOB会との五年間

為と思うが故の熱き心の内、誰が知るやん

泉 篤 志

私がこのOB会なるサークルに入会したのが五
年前。総員かつ華麗なる高校生を終え
た、昭和四十八年四月の日曜日であつた。今年
度で十周年を迎えるOB会の半分を知つてい
るわけです。私が入会した当時のOB会には、
現在に比べて特徴のある人間が多くいたよう
に思う。現在、理由はともあれこのような特
徴ある出れ人間が退会、もしくは籍はあれ
ども姿なし、という具合になつてゐるのは非常
に残念である。

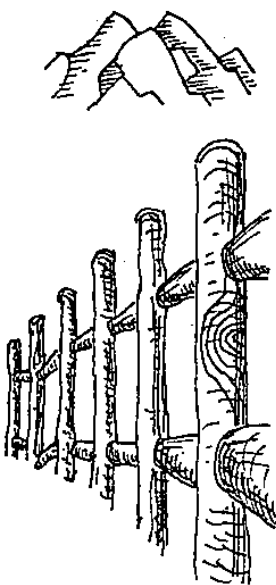
我のB会はそもそも、相模原高校ワニター
ズ・ゲル部を卒業した者に入会資格があり
その入会は、個人の自由意志にまかせてゐる。

多くの者は一度はこのOB会に入会する。顔を一度見せて、二度と見せない者。みたくもない顔を何度も見せる者。そして、後者の中からも何らかの理由で、退会する者、顔を見せなくなる者が出てくる。この何らかの理由が実に何ともいえぬ微妙なニュアンスがある。そしてこれが、現在のOB会に替む。白い巨塔である。

私の個人的意見としては、現在のOB会は山に固執しすぎているように思う。年間計画を見ても、月に二度づつぐらいの数で山行があるのに対して、レクリエーション的な行動や行事は、キャンプに、忘年会。これとても日時などにより、参加者も年々減っている。それにひきかえ、昨年の現役との交歓フットボール大会の、OBの参加人数が多かったこと。すでに結婚された人も、子供連れで気軽に参加できた。このような、一日だ

けで終れて、しかも誰でも参加できる行事を、年間計画の一部に加えてゆけば、定例会で申し分けなさるうちに座っていなくても着むので、定例会の参加人数も増え、ひいては、OB会の繁栄につながるのである。

かくいう私も、一年間近く山から遠ざかっている。私の場合は、特異的性格で自分が参加できず、関係のない事でも、話に参加して興奮できるので、見たくもない顔を何度も見せているのである。今年度初めて役員からはずれて、OB会を見つめなおして出した結論は、参加できない者には、興味が持ちにくく、定例会からも足が遠ざかり、そして出ずらくなる。この悪循環を断ち切





- * 鉄筋道：はいずかいほどの細い道、また人の通ったあと、...ルート。沢原の中で迷った時な...りになる。岩壁もよく見れば岩角がすり減っていたり、河となくよごれているのでわかる。
- * 切り跡：ササ原やヤブが切り払って開けてある所。道になっている時もあるし、単なる山火事よけの防火線もある。
- * けもの道：一見踏跡に似ているが、これはけものたちの通る道。なんとなく動物の匂いがしたり、ヤブの小枝に茶色の毛がひっかかっていたりする。人の踏跡は普通尾根やピークに向かうが、けもの道はどこまでも横に山腹を巻いて行くのが特徴。
- * 右岸、左岸：沢登り、また沢沿いの道の場合、上流から下流に向かっての右、左を指す。ガイド文中に常に出てくるので注意。
- * ヘズリ：山の急斜面や岩壁を横に這い伝うこと。沢歩きの際、岩の根方について川中を歩いてもヘズリである。
- * カトーススキやナガヤの類が茂った明い草履のこと。



るには、参加意志を会員の一人一人に持たせることである。

以上とりとめもなく書いてきたが、会員の方々にハレでもう一度理解いただければ幸いです。



わたしの山と旅

Ⅱ 幾つかのエピソードを振り返り

そして今Ⅱ

萩原 進

初めての山

生れて初めて登った山は印象深い。中学三年の正月、創立まもないワンゲル部の、ご来迎を山の頂上から見るといふ企画に悪友から誘われて参加したのが、僕の初回の山行になった。霜柱の長く延びた夜の山道を小仏峠から陣馬山へ向う途中、行き交う登山者が、「明けましておめでとー」と声をかけて往くのと、こんなに山に登る人というのは多いのかと、そんなことが新鮮なおどろきだったのが今でも気憶にある。服

装はセーターにジャンパー、それに運動靴で、二枚重ねに履いた靴下の下から寒気が体の心までよじ登ってくるような気がした。この時は仲間二人が腹痛をおこし、山頂を踏めず下山することになったが、それにもかかわらず初めての山は今でも気憶に新しい。

横有恒氏のこと

ぼくが高校に入って、ワニゲル部に籍を置いたのは一年の二月だから遅い。それまで軟床にいたのだが、ある日、へこいつは俺にはものにならないな」と開眼して、ワニゲルに入ることにした。そのことを入江先生に言うところまで俺のときか。と、いつものおどけた調子で責められた。入江先生はワニゲルとテニスの両方の顧問をされていたのだ。それから一年ほどは丹沢や、伊豆、奥多摩の山々へ登った。山がおもしろくなりかけていたところだ。そんなある日、ある先生の伝で

横有恒氏が講演に来られた。その時ぼくは新聞委員なるものをやっており、講演の後取材をする、という事になった。「おい、お前ワニゲルだったな。丁度いい、行っ来い。」先輩委員長の一言で、ワニゲルの部長をやっていた岸田といっしょに出かけて行ったのである。若気の至りと言おうか、盲、蛇に怖じず、と言おうか、その時は、「私達の実際に登る山は、木々の繁った日本の山々であって、マナスルにアタックする」というようなものではなく、登山とはもともと自然の中に容け込む、というふうな気持ちの山行であっていいのではないでしようか。」というふうなことを反問したように覚えてる。私は氏について何も知らなかった。そして横氏は、「その通りですね。」



心がけ次第で私には山や自然からいろいろ
な事を学ぶことが出来るんです。そういう気
持ちで私は著書に「山旅」という言葉を使っ
たんです。と云われた時、ぼくはいい気持
ちになっていた。その後何年かして氏の著書
を読んで、ぼくはぼくはすかしきを味わった。氏
の山行の履歴は理屈ではない、純粋な、登り
たいという気持ちから始まっていることを知
ったからだ。

ぼくの山の履歴書

ぼくが山へ登り始めて十二年になる。別に
冬の槍を極めたわけでも、バットレスへ取り
ついた事があるわけでもない。振り返ってみ
ると無中になって山へ取り組んだころという
のがない。交々として十二年の間、あっちの
山こっちの沢とふらふら出かけてきた気がす
る。そして今、振り返って思うに幸か不幸か
それがかえって山への思慕を減退させずに
いる原因になっているように思える。これは

いい教訓だ。日記をつけるのなら、毎日など
と欲張らないで、月に一回でも書きたい時に
書けば、十年でも二十年でも続く。話が横道
にそれた。本題に戻そう。

現役の合宿で行った岩木山、八甲田山は懐
しい。盛岡からはまだ電化されておらず、口
五一に揺られて行った。弘前ではお盆の祭り
を見物し、奥入瀬を溯り、十和田湖を遊覧船
で漕った。酢ヶ湯温泉のキャンプでは、毛布を
封筒状に縫った。寝袋は寒かったのが今で
は懐しい思い出である。大学二年の時、北海
道の、山と旅へ出かけた。ニセコ、利尻岳へ
登り、大雪のお花畑を縦走した。羅臼岳は無
茶をした。知床半島の横断の下りで、雪渓と
濃いかすにまかれ、道に迷い、キヤラバンは
むしろ濡れになった。

倉穂の縦走ではギレットを前に台風に遇い
、小屋を前に南岳麓小屋へ三泊し、小屋の
古株になった。鷗冠山での遭難騒ぎ、一升
瓶担いで的神ノ川合宿、距離が長くてうんざ

りした東沢湖行、丹沢での遭難救助、冗談ばかり言いあっていた塩見、北岳の縦走、みなそれぞれに新鮮な思い出として残っている。冬山を始めたのは四年前だ。以来毎年出かけている。八ヶ岳北―南部縦走、北岳、赤岳、奥ベース、そして今年の上州武尊と、それぞれに厳しく、それ故に懐しい。

そして現在、これから登りたいと思う山はまだまだ多い。けれども急がない事にしている。山は逃げないから。ただ体力が衰えない内に、それなりの山へは登っておきたいと思う。

山はぼくが心変りしない限り、いつまでも師であり、親友であり、そして恋人であり続けるだろう。

ちよっとO.B.会のこと

ここでパンを置けばいいのだが、磯村さん



日く、ちよっとギスなので、O.B.会十周年お祝い申し上げます、と話題を変えよう。会員がお祝いの言葉もおかしいが、今はすなおにそう言いたい。ぼくは「山々」というものに出会ったことを嬉しく思う。中学の時から卓球、バレーボール、体操、そして軟庭といろいろやってみたが、山ほどしっくりとするものはなかった。そしてその山行のほとんどがO.B.会の仲間とのものである。O.B.会があってぼくの技術があり、山屋があると思っている。十年の間いろいろな手余曲折があり、後回しだった。けれどそれらは会員の努力で乗り超えて来た。会員諸君。どうか、自分がO.B.会の中で何をするかを考えて、末長くつき会っていただきたい。



私の事

ワゲル部の創設・OB会の創立期のこと、そして私とOB会との十年

諏訪部信一

「まだそんな事に無中になっているのですか。」「まだはないでしょう。僕にとっては大切なことだと思ふからやっているのさ。」
「もういいかげんにしたらどうですか。」

私は県相の二期生・高校へ入った時相模原高校にはワゲルも山岳部もなかった。私の方を特にクラブへ入ることもなく、平凡な高校生生活を頭の中で考えていた。入学して間もなく、新しいクラブができた。いやできるらしいと人から聞いた。入学の時知り合い、親しくなった友人が、ワゲル部だから一緒に入ろう

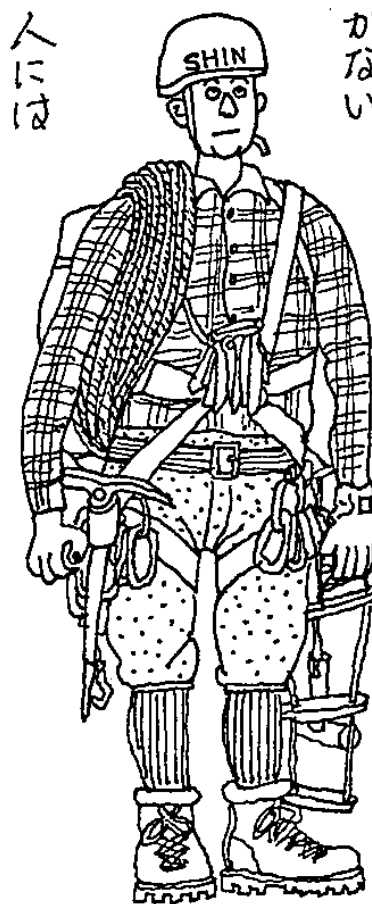
とさかんに言うので、説明会を一緒に聞きに行った。それが私とワゲルとの最初の出会いだった。若い顧問の先生を中心に、一期生、二期生が多数集まっていた。クラブが整足し、私も入部、活動が始まった。

クラブの設立に中心的メンバーだった一期生は創立後間もなくやめてしまい、最初それほどのだたなかった一期生の人達を中心にクラブは活動し、順調に山行を続けて行った。顧問の先生方も山岳活動のベテランの方や兄の様な相談相手の方と充実した活動を行うにふさわしい陣容が出来上っていた。そして後輩もでき、追いつけ山行で三年間の思い出を胸に秘めて現役の生活は終了していった。

私が卒業する三月、先輩である一期生から、クラブの事で会合があるとの連絡を受け、他の人達と集まったところ、OB会創設の話が出た。私はもちろん賛成であった。

その時、一九六八年三月、OB会は創立された。当時の会は、入会時に五百円ほどの連絡費を払い、皆で何かする時は幹事が連絡をすると言うものだった。しかし翌年、一つの転機があった。それは最初に登録された人達からの連絡費の集金が進まず、支出は多くなり、会の活動は特になく、同窓会の域を出ないという大きな問題であった。その為、それまでのOB会は発展的解散とし、同年卒業の三期生を含めて話し合いを行ない、新OB会へと体質の改善を行なった。会は現在のような役員制とし、会費を年度毎に徴収した。七月頃、話し合いの中から会報を作ったら、との声があり、『やまぐつ』の一号の完成を見る事となった。会員の家へ毎晩のように集まって行なった会報の作製は、当時ほとんどどの会員が学生であった事もあり、短時間に集中して、ページ数は少ないながらも、記念すべき

ものとして出来上がった。当時は会には規約もなく、会員相互の話し合いで運営されていたが、翌、一九七〇年一月、役員の間で進められていた規約の話し合いが始まり、大きな議論となっていた。問題点は会の性格であった。会をより山岳会的なものとし、山に行かない



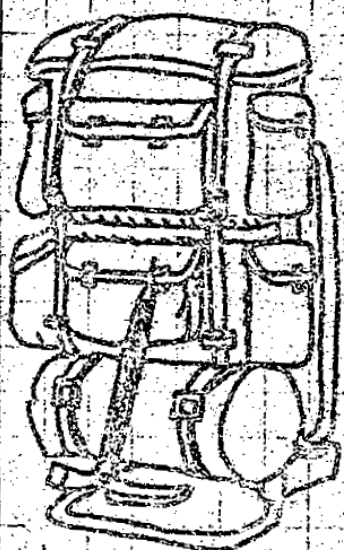
人には在席する意味がないとする考えの人、山へ行かない人をも含めて、同窓会的な存在でも良いのではないかと考えの人、それぞれが規約の文章の一字一句に対して自分の意見を言い、話し合い、現在の規約となり、四月より実施されたのである。

会の青書である規約が出来、やがて定例会も始まり、会の活動も盛んになっていった。しかし、その頃から、それまで増加するだけだった会員の中に退会者が出始めた。会員のほとんどの方が学生だったものが卒業し、社会人となり、ある人は家庭を持ち、仕事や家事が忙しくなったためであった。私は二期生と云う事もあり、高校のクラブの発足を自分で見えてきた。そして、在学中はそのクラブで選んだ。そして卒業後は、この会の発足に参加して、今まで一緒にやっていた。その間、多くの先輩や友人が会を去って行った。私は最近、会については自分にも責任があることを痛感する。私を入れた最初のメンバーは、O会を作った。そのメンバーの多くは今はいない。会はまだ歩き始めたばかりである。私一人で出来ない事ではあるが、現在の会員全員で力を合わせれば、会がしっかりしたものになる。私はそれまでこの会と死ん

なる必要がありそうである。まだそんな事には、と言われるかもしれない。でも、まだこれから先の長い道がある。そして、それは三十年後なのか、三十年後なのかは推測し難い。しかし、そのときまでには、この会の本当の価値がわかるような気がする。またそんな事に思いついてはいるが、

私はそこで、これから先、

「まだそんな事に思いついてはいるが、



O B 会 の 十 年

◆OB会10年の歴史を年表にまとめてみました。既刊のOB会10年史とあわせて、資料不足なところを補って、行事報告がありまじらう。と指導するれば幸いです。

年	1968	69	70
8	3	4	1
6		5	2
5		6	3
4		7	4
3		8	5
2		9	6
1		10	7
0		11	8
9		12	9
10		13	10
11		14	11
12		15	12
13		16	13
14		17	14
15		18	15
16		19	16
17		20	17
18		21	18
19		22	19
20		23	20
21		24	21
22		25	22
23		26	23
24		27	24
25		28	25
26		29	26
27		30	27
28		31	28
29		32	29
30		33	30
31		34	31
32		35	32
33		36	33
34		37	34
35		38	35
36		39	36
37		40	37
38		41	38
39		42	39
40		43	40
41		44	41
42			
43			
44			

行事・活動

備考

SWVOBA創立

一期、二期生にて

新OB会に改組

神の川合宿

北陸旅行

キャンブ(奥相模湖)

「まぐろ」を二号創刊

水無川合宿

水無川合宿

水無川合宿

水無川合宿

水無川合宿

水無川合宿

全国総会

神の川合宿

夏合宿

お月見山行

奥相模湖にて忘年会

黒川鶴冠山

富士山周回(三ツ峠合宿)富士山(4月9日)

水無川合宿

五月合宿(表銀座縦走)

夏合宿(後立山縦走)

白馬一五竜

大期(大房山行)

後立山・黒川・白馬

三ツ峠合宿

三ツ峠合宿

三ツ峠合宿

三ツ峠合宿

三ツ峠合宿

三ツ峠合宿

三ツ峠合宿

三ツ峠合宿

三ツ峠合宿

71	4	オ三回総会	(オ三期 諏訪部信一)
8	夏期キャンプ		
11	定例会開始(オ二回)	於青丘会館	
3	冬山基礎訓練(オ一)	小栗先生指導による	
4	オ四回総会	(オ四期 倉地哲朗)	
5	西丹又普天春合宿		
6	小栗先生より山	茨城贈される 倉地宅保管	
7	夏合宿① 後立山縦走		
8	② 表銀座縦走		
11	現役との交換会		
12	忘年会	富士山ハイキングパーク	
4	オ五回総会	(オ五期 大用友也)	
5	新人歓迎山行(三ヶ峠)		
5	吾合宿(奥秩父)	瑞穂山・金峰山・小川山	
7	夏合宿(白峰三山)		
8	キャンプ	奥相模湖	
11	現役との交換会		
12	忘年会		
	富士山周辺山嶺一周ワテリング全行程完了		
72	3	冬山基礎訓練(オ一)	
4	オ四回総会	(オ四期 倉地哲朗)	
5	西丹又普天春合宿		
6	小栗先生より山	茨城贈される 倉地宅保管	
7	夏合宿① 後立山縦走		
8	② 表銀座縦走		
11	現役との交換会		
12	忘年会	富士山ハイキングパーク	
4	オ五回総会	(オ五期 大用友也)	
5	新人歓迎山行(三ヶ峠)		
5	吾合宿(奥秩父)	瑞穂山・金峰山・小川山	
7	夏合宿(白峰三山)		
8	キャンプ	奥相模湖	
11	現役との交換会		
12	忘年会		
	富士山周辺山嶺一周ワテリング全行程完了		
76	8	夏合宿(奥秩父)	
1	冬山山行(南アルプス北岳)		
2	菅平スキー		
4	オ八回総会		
5	吾合宿(尾根)		
8	夏合宿① 南アルプス		
	② 白馬		
	キャンプ		
12	忘年会		
1	冬山合宿(南アルプス)		
4	オ九回総会		
5	吾合宿		
8	夏合宿① 南アルプス		
	② 朝日連峰		
10	お月見山行		
12	忘年会		
1	冬合宿① 武尊山縦走		
	② 南アルプス		
2	スキー		
	新日本湯沢		
77	8	夏合宿(奥秩父)	
1	冬山合宿(南アルプス)		
12	忘年会		
4	オ九回総会		
5	吾合宿		
8	夏合宿① 南アルプス		
	② 朝日連峰		
10	お月見山行		
12	忘年会		
1	冬合宿① 武尊山縦走		
	② 南アルプス		
2	スキー		
	新日本湯沢		
78	8	夏合宿(奥秩父)	
1	冬山合宿(南アルプス)		
12	忘年会		
4	オ九回総会		
5	吾合宿		
8	夏合宿① 南アルプス		
	② 朝日連峰		
10	お月見山行		
12	忘年会		
1	冬合宿① 武尊山縦走		
	② 南アルプス		
2	スキー		
	新日本湯沢		

1977年度 行事報告

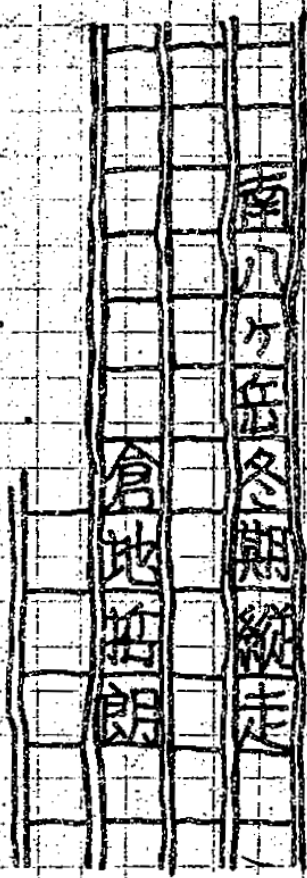
春合宿(5月) 奥秩父

夏合宿(8月) 南アルプス
朝日連峰

お月見山行(10月) その1
その2

忘年会(12月) 大婦園
(12~1月) 南八ヶ岳
武尊山
冬合宿

スキー合宿(2月) 新平湯沢



冬の南八ヶ岳縦走計画が

出されたのは、確か十一月の定例会の席であった
と思う。青藤君が南アルプスや奥秩父の計画
と共に、八ヶ岳の山行計画を持ってきた。同行
者を募った時、私が同意し、〇〇会冬期山行
の二つとして、正月に三右程度で行くことに決

った。

冬の南八ヶ岳に入る時、多くの人は、茅野
から美濃戸を経由して入山するが、私は
小海より楢子湯を経て、夏沢峠に登り、
硫黄岳から編笠山まで南へ縦走する計
画を立てた。

正月二日の夜、相模原を出発する時、暖
冬には珍しく雪が降り始めていた。何かこ
の先の天候を暗示する様であった。最
初の夜は本沢温泉に泊った。幕営の手定
であったが、内張りが無いのと、雪が激しく降

つていたために、温泉に泊ることにした。中に入るとミヅナが遠く地方の大雪を報じていた。夜には雪もやみ、空には星が出て、明日は晴れかと思われたが、翌朝にはまたどんよりとした空から雪が舞い降りていた。白一色の静けさの中を横沢峠へ向う。ところどころに、鬼らしい足跡が見られるが、その姿を見つけることはできない。峠には吹きつける風の中で無人の小屋が二軒静まりかえっている。

森林限界を越えると風は一段と強く、諏訪側から横なぐりに雪とともに吹きつけてくる。視界は悪く、唯たすらにジグザグに登りつづける。他の登山者の姿もなく、十数メートル先の青蘆君のキスリングだけが、ぼんやり見えるのみである。硫黄岳に着くころには、ややバテぎみになり、一刻も早くこの風から逃れたいと思うだけであった。頂上での休憩もそこそこに今日の難所、横岳に向う。大ケルンを目印にす

ずむ。このあたりより、他の登山者とすれちがったりするようになり。トレースがしっかりしている。横岳は思ったよりスムーズに通過できた。場所によっては道をまちがえ、壁の上部に出てしまいやすい所もあるが、慎重に動けば特にいやな所もない。晴れていれば正面に赤岳とそのバックに南アルプスが眺められるが、今日は残念ながら、視界は無し。赤岳石室が開放されているとの話で、今夜は石室若りを予定していたが、実際は閉鎖されていた。風を避けて休んだ後、頂上小屋まで頑張ることにした。小屋には同宿者が七、八名いたが、これより南へ縦走するパーティーは我々だけであった。明日こそ晴れることを期待し、暖房のよくいた室で眠りについた。

五日、今日もガスにつつまれ、一向に晴れる様子は見えない。晴天は諦め、いよいよ最大の難関、キレットへ向う。下り始め、すぐに行者小屋方面の道と分かれ、ガス

につつまれたキレットぬ下りにかかる。岩陰から後縁にはた途端、今まで以上に猛烈な風に見舞われた。歩くことはおろか、呼吸をすることも苦しい園である。少しずつよるめきながら下る。時折突風で体が揺さぶられそうになるのを必死でこらえ、はいつくばる様にして一歩一歩下る。キレットの底に近づき、森林限界に入るとやっと強風から開放され、ほっと一息つく。キレットは強風とカラ場の通過で極度に緊張し、これからの権現岳までの登りが思いやられる。キレット小屋で軽く食事をとり、テルモスの熱いレモネードを飲み、また雪と強風の中へ出発。権現岳までは急登で、ところどころ悪い登りがあり、ツルネと呼ばれる所から頂上まで緊張の連続である。長い鉄ばしごを登りきると権限岳の頂上である。斎藤君も私もキレットを越えるのは初めてであり、何とか越えたものの、かなり疲れてしま

った。今日はこの先の青年小屋まであと一頑りである。ギボシの通過でルートを誤まり、斎藤君がバランスをくずし、滑落した。幸い五メートル程で止り大事には到らなかった。正しいルートに戻り、改めて下り始める。ここもカラ場とフサリ場があり、キレット同様充分気をつけなければならない。しばらく林の中を下り、青年小屋に着く。この小屋は開放されており、今夜は二人だけだ。六日。編笠山の頂上へは一時間程で着く。今日もガスと雪で、到々最後まで晴れなかった。だが一歩一歩確実に、ここまで歩いて来た事実は変らない。出発前、体力に多少の不審もあったが、斎藤君のファイトに引っぱられ、何とか歩き通すことができた。小淵沢までの長い道のりをゆっくり下るうちに、何とも言えない充実感が体の中から湧いてきた。



1. Geburtstag

四日二二日。二の日は私たちは、奥秩父に出発したのだが、とにかく忙しかった。在任時まで物理の試験という世にも不思議な試験を受け、あめて帰路についた。おまけにこの日は風和気味で、頭がガンガンしていた。小田急は恒例のことだがヤウヤウ詰め。しかし、最近では何のせぬらにもよく、通勤員の急行電車に乗換する自分にメッとするのである。この日は家に帰ってからバックミックスを聴いて大あめて。風邪のたたりか、山へ行く前からフラフラしていた。そして私は、土時半頃の相模線に飛び乗った。相模線にゆられながら、あめをどしかった今日の一日をふり返り、落ちついたところまで気付いた。

今日は歳の二十歳の Geburtstag だ。ミロ。

in sieben bleiben

七ミロ後の時四九分の列車に飛び乗った私たちが荏苒駅にはき出されたのは夜中の三時半頃だった。ここで約一時間程バスを待たねばならなかった。冷たい風がふきつけるバス停で、ガッソの陰に身をひそめ、グッと座ったまどでいた。やけに星がきれいだった。

3. Dämmerung

夜が明けたのは、バスにゆられている間だった。夜明け—Morgen dämmerung—正に微かな色彩の世界である。刻々と変化する色。一瞬として滯まることはない。青をゆく青とちがう赤の世界。ある英文書に Dämmerung—青赤色—という言葉があったが、正にこの Dämmerung の時の色をさすのであろう。日本語ではこの色の時刻を曙、あるいは黄昏という。そ

ういえ、増富から瑞牆山荘までの林道に右
つて、アケボノスミレが可憐な花を咲かせて
いたのが印象的だった。

4. Abent some

増富から二時間余り、溪流沿いの林道を歩
く。ヒカドツツジの黄色い花が新緑によくマ
ッチしていた。路傍にはスミレの花が五月の
日を一斉に咲けて、咲いていた。とにかくい
い天気だ。幕場で一休みして瑞牆山へ向け出
発する。雪溶け水を集めた沢を登ると急登が
始まった。シャクナゲの幹をかきぬけていく
と、ひまわりより南けた岩の上に出た。風は冷
たいが、少し傾いた午後の日ざしがまぶしい。
眼前には、江戸岳、南アルプスの山々、背後
には金峰山、小川山の大展望。Abent someの
に照らされ幕場に向かう。空は茜色に染まる。
私は朝日よりむしろ夕日を好む。幼い頃、夕
日に照らされた自分の背丈の何倍もある影を

追いかけて家路についた思い出。今でも新鮮で
ある。

5. sterben!

翌日私たちは、金峰に向けて出発した。植
物というものは本当に正直である。どんどん
登るにつれ、アケボノスミレの広葉樹林からシラベ
の針葉樹林へと変わっていく。ハイマツの生
える森林限界に達する頃は、まだ相当の雪が
あった。森林限界からは岩稜を行く。五丈岩
が次第に近づく。頂上へは見た目より簡単に
たどりつくことができた。今日も快晴。展望
は抜群だった。この頂上で、いや正確には五
丈岩でちよつとした事件が起こった。この五
丈岩は登ることはできるのだが何せ岩場であ
る。よせばいいのに（奥は私も驚いたのだが）
ハゲが登り始めた。小っちゃはハゲのこと、危
なかしかったがなんとか登っていった。しか
し最後の壁が懸かった。頂に手をかけたが、

足が滑ってhanging、つまり宙吊りになってしまった。その時彼女の口から発せられた言葉が『死ぬー』『独語で《sterben》。この声は岩に反射して下にいる人にも聞こえたという。あとで彼女は劇中に出てくると、sterben、sterbenー死ぬ程の恐怖だったそうである。それじゃ五丈岩の上から見えた山々なんて覚えていないだろうなあ。

6. Heimgang

四日間にあたる山行もあつたという間に過ぎ去ってしまった。山を下る日というのはいつも山にいつまでもいたいという感情と、早く家に帰りたいという感情との間で葛藤が起る。帰りの林道、三日前に初めて通った道だが、ほとんど存くつかしさを感ずる。そして帰りの列車の窓から今まで私たちがいた山を振り返る時初めてわかるのだ。私たちのHeimgangとは、山へ行くことなのだーと。

4月29日
12:50 富士見峠 0:48
| 斐崎 3:32
4:30
| 増富 5:15
6:00
| 瑞牆山荘 8:05
8:55
| 富士見峠 9:30
9:35
| 富士見峠 9:50
12:10
| 瑞牆山 1:10
2:05
| 富士見峠 3:20

4月30日
富士見峠 8:00
| 大日小舎
| 大日岩 9:00
9:15
| 金峰山 11:20
1:05
| 大日岩 2:30
2:40
| 富士見峠 3:20

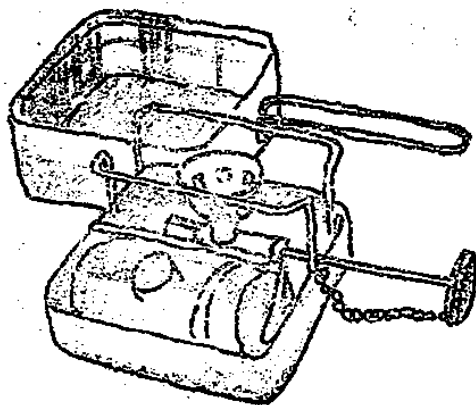
5月1日
富士見峠 11:50
| 富士見峠 11:15
11:20
| 瑞牆山荘 11:40
11:55
| 増富 12:05
12:10
| 斐崎 1:45
1:56
| 高尾 15:54

夏合宿
江成 利一

12月十四日、几日からの約一週間にわたる南アルプス縦走の最終日である。朝テントから外を見る。天気はあいにくがスッている。昨日の雨から思えば当然のように思え、この

どおにもほらない自然というものを認識し始める。夏とはいえ、この肌寒い中で三人は出発へと準備を急いだ。出発、一泊して豊島小屋のテント場を後に山の岳へ向う。オーダーはたぶん大房、江成、小沢の順だったようだが、気がする。山の岳に立つ、ガスは豊島小屋付近の部分的なものだった。私たちは大展望に恵まれた。私は今まで通って来た縦走路を見ながら心に思う。ラッキーにも車に登せてもらえたこと、あの歩き始めた伐採跡の熱い登り、聖の頂上で聞いた大房さんと小沢さんの会話、二のリンドウ何というの？、地図を見ればわかる、聖岳から見た塩見岳、ガスのまく百間平、塩見岳で見た教育熱心な大房さん、塩見岳から見た北岳、雨の仙塩尾根、山の岳から見た北岳など、このように刻々と変化して南アルプスの大展望、そして大房、江成、小沢の三人によって繰広げられた行動に、言葉に、考えに心がふるえる思いである。中白

根でし、やけに人が多くなってきた。これより、この縦走の最後の目的地北岳に向う。頂上は、とかく有名な山々と同様にまるで新宿のように人が多いところであった。それらの人々の満足観や感動はそれと違ったものであろう。しかし、それらは結局山に登る人の利己にすぎないものだ。私自身も思っている。私たちはこれらの縦走路を後に大権沢を下る。大権沢はゴミの多い沢だ。しかし、そこに見ゆるバットレスは壮観だ。古河原に着く頃には雨も止んでいたが、甲府よりバスは途中土砂崩れの為、通行止めであった。しかし相模原山岳協会の大房さんや小沢さんの知りあいである？さんのおかちでタクシーに乗ることが出来、奈良田経由で甲府に向うことにした。途中、温泉でゆっくりしたかった



た。私には目的が達成された後、それを振り返り語るのほっとも難しく思える。

東北の山

恩田 美豆乃

東北の山は、おいぶん前から行ってみたいと思っていたところです。緑濃くどっしりした山容やきつと山の頂からは海が望めるのではなにかという思い。そして私の住んでいるところからおいぶん離れている。何かとてもちがっている山の二つを思いつけていたのです。

夜行列車で山形に到着。駅前広場に出ると、何か見おぼえがあるなと思ひました。そうそう二丘も前、月山に滑りにきたとき、サクランボの籠をかかえて、歩きまわったところだった。東北はほじめてだと思ひていたのに、

山形にはまた二つがあつた。まだ何も知らなくて驚く。宮庭から急に山深い感じがしてくる。白竜に降りる時、空はくもつて雨が降りだした。朝日鉱泉はテントがはれたいと聞いて、鳥原山へ直接登ることにする。雨の中を、何人かの人達と出発。林道から、木立の中のジグザグの道を登る。ずこし眠くて、暑い。晴れていたらどんばにまいてほら直ぐうつと思う。頂上の少し下にテントを張る。風が吹きぬける。はがめのもともよいところ。ずつと下の方まで黒い雲がおおつていて、ときどき雨が降りだす。

朝起きると、くもり。今日は三つの頂を二えて竜内まで行く予定。湿地帯の道を歩いて行く。朝日連峰だから、朝日岳というのがあるのかと思ひ。たら、小朝日、大朝日、西朝日という三つの朝日岳があるんだなと気がつく。西朝日岳までくると空は青く、つて大命星の

頂上の広場では、何二かのタルーフが禁じこ
うに集まっていた。たれにすかきり緑色の大
きい尾根がつまれている。二んぼ山の上にい
ることがとても不思議な感じがしてくる。荷物
をおろして、そんな山の中でひっそり思っ
てみる。尾根道は、まるで畑のあぜ道みたい
にみどりの草がいっぱい。私は二んぼと三ろが
大好き。童門小屋はびいぶん人がいる。すこ
し下のテント場におちつく。やわらかな草の
茂った素直な広場を、テントの屋根でしに白
くけむった山が見える。今夜の食事はシモ
とりのテントの人ヒレタスをお願いして
ごちそうがふえた。

朝、夕べの白い山が赤くそまっていた。空は
明るい。今夜は軽快な尾根歩き。直ぐに小
さな山が咲き出す。今日は一人でずんず
ん歩いて、細い山道は、きれいな水が流れ
る。でも小さな小屋だった。あんなかい陽

の光がさびしくて、ひとねむりしたくなる。
前に見えた大きな尾根が最後の登りになる。東
山。山の間に風雲のとも色の花や、りんご
うがとてちひっそり咲いている。頂上からは
はるか向うに海のようなものが見える。あの
島は佐々木島だと教えてもらう。二んぼ山の
上から眺めている人がいるのを知っているかし
ら。思ったとおりの海が見えたのです。下の方
にはこれから下りて行く大鳥池が光って見え
る。りんごやうおべんとうを食べてひと休み
する。すこし下ったところで昼寝する。目が
さめると、つめたい風がもう夕方にちかいて
とをしらせてる。もうすぐだという安心感が
変にぼるく身体にのこる。尾根道をきいぶん
おりてから湖畔にでる。ヘビがニョロニョロ
と出てくる。直をおろるおどる歩く。夜はす
ばらしい星空だった。安心して眠る。朝、す
ばらしい上天気の中を出発。もう下ったことも
ないと思っていたのはまちがいで、本

ジツサク道を川のそばまでくだった。林道に出て、あと三時回程歩く。山道から田んぼや人家のあるところまで景色はどんどん変わっていく。バス停について、ベンチで横になる。男の人はすぐ下の川へ水浴びに行ってしまう。バスの窓からは見渡すかぎり水田がつづく。長いこと乗って鶴岡の駅につく。駅前の旅館に宿を求めて、ひさしぶりのおふろと、やわらかいふとんに癒された。これは私の足で少しづつ歩いて又町にたどりついたというさっぱりした、うれしい気持ちでいっぱいになる。

お目見山行①

中藤 桂甲子

昭和五十二年十月九日でありました。曇り空のお世辞にもお目見日和と言える天気ではなかったのですが、OB会の仲間と山へ行くの

も久しぶりの私は多少興奮していたのでした。年とともに、山へ行くのも億劫になってしまふのですが、せめて登山靴に真菌が増殖している程度には、履いておくは必要だと思います。(私ほど定例会によく出ながら、山へ行くのは人も珍しい。)

九日お目見園ぎ、橋本駅にはむさくらしい降りをした若者が三々五々集まってきていたのでした。直行く人は、私たちに冷たい一瞥を送ると、足とりも軽やかに、何処ともなく消えてゆくのでした。(ああ、こういう青春もあるんだな。) むさくらしい集団の構成人物はと言いますと次の様々メンバーでありました。諏訪部さん(以下敬称略)萩原、倉垣、恩田、新津、秋山、井上の、上野、森田、小沢、江成利、高城、山本、小宮、以上です。どういふわけか、リーダーの斎藤君は現われなかったのです。内心、今回の山行はアホな山行になりそうだと思いつながら、私もアホな一人

にほってゆくのでした。どうも今回の習わし事はお月見という情緒豊かな趣旨とウらはらに、初めからツキに見放されていたようだったのです。それを列記すると

1. リーターたるべき斎藤氏が杖々を見放したこと。

2. その為十二時に橋本に集まりながら、日が暮れてから歩き始めなければならなかったこと。

3. 懐中電燈を忘れたこと。(これは個人的なミスだが)

4. キジがラ山には、すでに先客がいて、とても飲んで騒ぐ雰囲気ではなかったこと。へそれでもめづるに騒ぐ。参々怒られたが)

5. 降りみ降らぶみの天気であったこと。

6. 求道的なのは九日の晩は新月であった。

7. 月は見えなかったが、美しい星座だと皆んぼで見あやを遠端、あっという間に

かすがかったこと。

戒多に山に行かない私が来たからいけないのでしょうが、責任を感じています。

愚ろかしい山行であったのですが有意義かつ感心したのは、

1. 山口徹ちゃんが夜道を翌日、後かたづけをする為に来たこと。

2. 高城君があけびをかついで登っていったこと。

3. 萩原さんは、一人縦走する為、私たちが帰っている間出かけていったこと。サムライのようです。

とりとめのほい事をかいてしまいました。山は楽しいものです。そしてOB会の人たちばかり0000です。皆さん、来年こそ月のあるお月見に行きましょうネ。



お月見山行②

井上 則子

十月九・十日とお月見山行と題して丹朶に出かけて行きました。この日橋本に集合して買い出しに行つてそれから車何台かを運んでレストランで優雅に食事をして、夕方近くに丹朶登山口に到着。

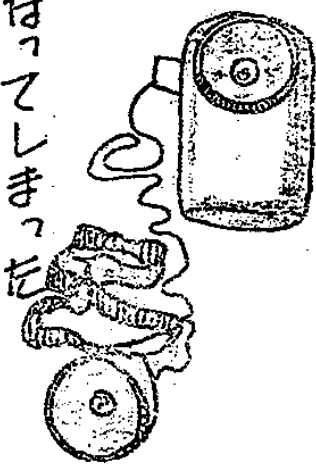
私は今まで丹朶は何回か登ったけど、とてもつらくて登りきったことは、ほんの数回しかなかった。たので夕方から登って途中でバテたらどおしようと思ひが氣でなかった。今から三時目で着くかしらと思つたり、今から山に登らずこのまま帰つても……なんて葛藤しながら山を見ていた。しかし今さら、それにこの記念すべき日十月九日は私の二十歳の誕生日。私はぶつと二十歳のお祝いは山で乾杯をと思ひ続けていたのだから念願がかなおうとしてゐるのだから、登っちゃおう、頑張ろうなん

て自分に言い聞かせてできるだけ荷物を軽くして後ろの方からドボドボと歩いて行きました。ほつかしい道、展望、高校の時初めて登った山、二十歳。いろんなことを考へながら。山に慣れたのか以前よりだいぶ楽に登れた。もう懐中電燈をつけなければ歩けないぐらい暗く、道はぐちゃぐちゃで、ほんとに細く細くて。でも山の空はとてもきれいな星の星の星の歓迎を受けながら、避難小屋に着いた。やはり丹朶、そんなに楽しいコースではなかった。しかし今夜は楽しい楽しい宴会。ホットドックを作り、夕食を軽く済ませ、待ちに待った月見酒と外に出たが、あいにくお月様は見えず。でも二十歳の乾杯をして、夜空の星に見守られながら、おいしいおせんべいという向にたいたら。私もすばい食欲で、この集団の中で大活躍して満腹。二十歳になつて初めてのお酒もおいしかった。たし満腹。お月見も終わり、まだ飲みたらず、小屋の中で飲み始

ぬた、楽しいおしゃべりはつきあった。高
校生らしき集団も小屋にいて、夜もかなり遅
いので、静かにするようにならした人に差
意されてしまった。当然の事だと思つた。皆
もそう思つたのであろう。それからおとどし
く寝た。私も疲れがでて、ぐっすり寝こんで
しまった。

翌日、元氣いっぱい。一部の人は知なき頃
やつた電車ごつこの様にロープで輪をつくり、
姫次におかつた。この時、誰かと誰かは列を
乱して先に行つてしまつた。ああ、うらやま
しい。もはや暗い夜かつたが、山のすがすが
しい空気を吸い、紅葉もかなり深まつたきれ
いな色づいた花だらけの道を歩いて姫次まで
行つた。そして帰りほとても早くかけおきて
避難小屋までもどつた。小屋に残つた人たち
は、小屋のそうじをしており、またときより
とてもきれいなやつていた。私はさすがにO.B.
本当に山の好きなる人達だと思つた。O.B.会を

改めて見直してしまつた。とても感激して、
小屋を後にした。記念撮影をした。おやの中
で写真を撮る、ほんとに、神楽の神楽がで
きた。山の奥があたり一面に夜露にぬれて、
まるで蜘蛛の世界のようなどころを透つたり、
杉の木だけが霧の中に立ち並び、吸いこまれ
てしまひやうなものもあり、今まで見たことも
ないものであつた。道もぐちゃぐちゃで木の
橋もあり、ここで安藤先輩はドスノ！と橋の
上から下に落ちた。そしてズボンに穴をあけ
てしまつた。そのおかげで十分注意を払つて
橋を渡つたので無事だつた。安藤先輩以外は
皆怪我もせず下山した。そして車に乗つてし
ストランで食事をしてお目見山行、いやお屋
見山行の幕を閉じた。
何事もなく無事に終
つた山行だつた。私
もこの山行を境に十
代も終りり二十代になつてしまつた



一夜明けて、狂野の夜は静かだった。あっちこっちに転がる酒の瓶、飛散ったス、ユーマン、クラッカー。それらを押しつけて、わがわが床の上に寝転ぶ人。そんな座敷の中で、夢を覚めた様子を眺めてて時をとる泉。昨夜、スラックセリカでさうそうと駆けつけた彼、夢から醒めた想像したであろう。

酒を飲んだといか付いまでも、いかやキャベツ、味噌と山椒の珍味を盛り、山椒を煮し、それらは鉄板の舞合の上でオイルとともに心安らぐ歌をうたっている。タラスに揺れる琥珀の液体、世を流す。どこからともなく流れて来るタイターの甘い調べ。新婚の嶋崎夫妻を迎えて、孤獨、思ひ屋、淋しがり屋の山を渡する者を

ちの志士公。津久井の郷、夫婦の夕べ、いざない。美しい。素直だ。(いざない可)

悲劇は(一部の人にとって喜劇は)みんなの顔をぼろ酔い気分が染めはじめた頃、そう、中央線のなんちやておじさん、奥は知世おじさんの登場とともに幕は開いた。今までのムードは一瞬にして裏から外へ、やい、静寂をさほりあけ、鉄腕アトム、レオウ、エイエエ娘を踊り、巨人の星をサインはVを演じ、しまいにタスル、スーパース、フライタ、クロス、千鳥が飛交い、ビョウ、ペアもま、青の必殺技。

新会員は……増田は窓から放り出され、小官は酒を飲んでトロリふだんはオトリ。トロミはミ子の様にはしゃぎまわって、あっちこちを飛びまわり、帯るところを知らず。中堅系は……今や鬼のパンツを追い抜いて、ビルボードもキャッチボクスも金丸つきの江成のヨカチニキ。タンポイ、だんて言わぬ

オーストラリアなんてより、いつまでも牙裏は猛者であつて飲めない畜生。先輩に女の世話までしてくける高城。あの甘い歌声は風呂場での録音のときものか秋山。彼らも酒の飲み方をす、かり心得て自己のペースを崩さず大騒ぎ。

倉地さん寝ちゃあいいけませんヨ。スッパさん、千子さん帰ったあとがしばらく、ちやあ、騒ぎは減まることを知らず最高潮。惣ちゃんおう、もっと飲んで。

河本やがクが来る時は戦火は衰え、彼らは殉戦者の如く、何ひとつない戦場から酒を掘り出し、傷つき疲れながらも意ある者をあつめ、讚美歌をうめ、フォークソングを歌い、ひどい酔払い運動でかえつていった。御苦労。

ドウドウと気のたつた桌をなだめ、トロントに目付で朝飯の仕度にかかる。あんなにじめられた惣ちゃんもす、かり元氣になつてやぎぎば作り。そして時間とともに荷物は運び

出され、もとの安普請のキャンピング小屋にもどつた。

いろいろ御意見もございませうけれど、こんは飲み会あつてもいいじゃん。また飲むヨ。でも最後に言われた。頭のいい人がバカやつてもいいけど、バカでバカやつてゐるの新津くんだけだつて。ひどい事いいやがる。

武尊山冬山山行

小沢 聡

冬山に来たのにほせか雨が降っています。

タクシを山口部落で降りて三人は歩き始めました。やはり荷物は重いものです。特に天幕は。上野原山小屋付近には短かいリフトもあり、スキーを楽しんでいる人がいた。三人はそこから右の山直に入り、スノッツを着けてまた歩き始めました。や、と山屋のテントが

ありきした。けつこう人が入っているもので
す。上から女の子が多敷下山して来ました。
山頂を往復して来たのでしょうか。来ずじに入
っていい所がみつかりました。雨も強く降っ
て来たのでここに避難することにしました。
十二月三十一日はあまりいい一日ではありませ
んでした。

翌朝、さらに氷をつめて行き
ます。稜線に着いたのはかなり
時間が立った後のことでした。

雨は降らずとも天気はよくありま
せん。谷川岳の上にはあいかわらず
雪があります。

私は過去にちこの武尊山の計画を立ててい
た。それは故栗田久弥氏の文章に引かれてで
あるが、尾瀬に行くバスの往手に見えるその
立派な雪をながめつつも行く機会がなかった。
冬山にここを登るといふ語を聞いて、早速候
察を行い登頂を目指すことになった。本職か



らのコースはやかいは岩場があるので上ノ
原から花味に出るコースをとった。

しかし、稜線にこのコースは悪い所はワ
イが、岩場は登りであった。稜線小屋を過ぎ
てから急斜面に居る。ワカンの氷を利かせて
登りつくと、平地が広場に出る。そして山頂

の氷のついた岩場を登り切ると稜線が
スが山ノ岳と東の串の間あたりに
人ば山ノ岳と東の串の間あたりに
に稜線を歩いた。夜は大雪とな
った。

翌朝、今日は晴れた。乗りつい
たスキーを撤収し出かける。家の串はいいした
ことも白いが剣ヶ峰ではいささか苔草をさ
られた。カイルを履用して確保しながら登っ
て行く。三つばかりの岩峰を越えたとそこに
は前回稜線まで来た剣ヶ峰である。

前夜で休んで下山にかかる。武尊オリン
ピアスキー場を目指して下る。スキー場から

はバスに乗って羽田に出た。あとは高崎でいつもの几高線に乗って帰って来た。

スキー合宿

秋山 徹

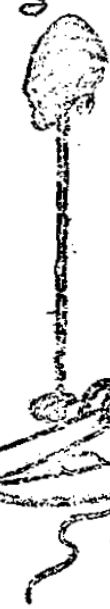
去年のスキーは人数不足で中止になったので、今年こそはと、ふたを明けてみれば、四名(萩原・千葉・秋山・小沢)であった。けれど山口さんの尽力によって前々から宿の手配が済んでいたのも、千葉さんの友達三名を加えて、新日本温泉へ向けて、非常に気難し、夜行で上野を出発した。早くや

寒くて暗い温泉に着いたのは明朝三時。宿から御之に素足で歩く。雪も積り、宿に皆んはで手分けして電話する。全く、電話リクエスト並みの回数で、けれども通じない。寒い中、気難き天国から、気難の地獄へはっしから、タクシーを探して、宿の主人を捜して、や

つと眠れできなかったのが午前五時。手近いの原因は女主人が寝違したため……。恨めしい気持ちで顔を洗って朝になった。

天気は雪がひどくて休み。宿の主人がおいでさん。山の風景はまあまあいいし、花が咲いている。皆んはあさまで一日帰る。下レニ下レに降り出る。年をいた者、若い者雪を得た自然のようにならなくて

いた。昨晩の寒不足も知らず宿にたどり着いた。夜は煙草の匂いにまかせ、遅くまでトランプをしていた。夜



の悪い人はいるのである。そればかりに千葉さんの友だちWさんであった。十やレオンを飲んだ。

翌日はお昼まで、各自充分寝て、惜しい気持ちで捨て、下レニ下レに別れをつけた。あと

はおぼじみの高崎一凡王子コースで園には縁の付いた南東合地に沈む夕日を見ながら、家路にいそいだ。下レン平に名残りを残して。

現役百キロ歩行につぎあつて

ニイツ マサミ

梨寮する十日の末、御膳沙汰している高城にむけた。土曜日の昼過ぎであつた。現役の百キロ歩行バックアップの為であつた。スワベ氏のジムニーを拝借してがむばつてゐる小塚くんは、懐いぬ園蔵のオイラの二台の車にキントンの、コンロどの、シユラフどのをつめ込み出陣した。足も痛め足腰もくらは合衆軍の口をひきつり、三郎生の就職くんは帰りがけだから黙って行けどいつてひきまひり込み、計四人であつた。途中、コンスリ宅へ寄つてお茶を飲み、話をして、時間をつぶし、三時

過ぎにコンスリ宅を出発。鳥居を横切くんの家へ寄つたりして、往々がテント場に着いた三のは照のあるうちであつた。

テント場への河原への降り口にはおんといぬが——何月何日、想い出高校、ワンダーフーはル部、キマニル予定地、と書きかいた——直ぐにの襟には、てあつた。この丘に住む想田くんのおじさんのしてくれたことであつた。あとでコーラをもらつたり、世話にばつてばかりであつた。車から荷物をあらし、キントンを張って、食卓をつくり、準備万端高城くんも加つて、あとは現役を待つのみ。

時計を更には、高城が現役を接いだ場所と時間を計算し、そろそろと思つて我家のあつたところまで来る出陣だ、待つ事〇〇分、家の灯もぼんやりと、来れど、来れど、肩を落としてでラズラズラ。やあ、おれがねと、おれが少し休みを取る間、おれが話をして、直ぐの横を聞く。おれれさんでした。あとひとふんば

りだよ。車は先にテント場へ、高城・佐藤
オレは残るゆゑかは林道をぶつきあい。一時
両余りの森道を懐中電燈は右へ左へと不規則
に揺れる。皆んが元気のゆりに黙口。

やつとテント場に着いた。留守番のコンス
トと標旗がシチューを作ってくれていい臭
い。壁にあの明りの下でみた、ビニール袋に
はいった吐瀉物の様子をミカンとは思ひ出し
たくもない。でもおいしかった。

ひとさゆぎするがほと思えば、静かに皆ん
はテントにもぐり込み、しばらくコソコソ
とソトソト聞こえたものの、すぐに静まり皆ん
は夢の中。夜中じゅう、上の林道を車が走り
ぬけ、ラリーの練習をや、気晴らしばかり
はいけぬも多かった。

朝は皆んはぐっすりと寝込んでいて、ほか
ほか起きず、起き出したと思つたら飯も食ひ
ずに眠っていた。時代が変われば山の生活も
変わるんだらと思ひ。昔、一女子部員が

の仕度、の忙しさの中で自分の事が思ふ様に充
分できず、歩き出してしばらくして、右と左
の旗が眩しかったという話を思い出した。

皆んちを見送って、テントをたたき、あと
片づけをし、我々も出発。

こうして現役の百キロにつきあって、我々は
ただの荷物運ぶでしやなかった。現役の名ま
えと顔も今思い返しても錯覚。熱しい思い
がする。我々が現役だった頃のOBは？と尋
ねてみたり、ちつとしてあやられる事があっ
たのではと尋ねてみたり。無愛着は現役の顔
顔、顔には秋々と静けあえぬ何を感じたし。
今回のつきあい、とても考える事が生涯に
りました。



和入 — わたしの山ぼくの事 — 投稿

『斐崎 ↓ 野辺山』

三〇キロ歩行

利本 康成

昭和五十二年八月下旬

午前三時五〇分

各駅停車に約三時間、座席のシートの堅さは
仮眠さえも僕にとらせなかった。「僕はこれか
ら三〇キロ歩くんた。野辺山まで歩くんた。」
と、自分に言い聞かせる。星空がきれいだ。だ
が体調はあまり良くない。

午前六時一〇分

切りの木道。二時三〇分歩き続けた。ずいぶ

ん距離をかせいだ気がする。辺りが明るくなっ
てきた。暑くならない内に、一キロでも歩こう。
いらなくなった懐中電燈をガックに入れる。さ
っきのペースで歩けば良いのだが。

午前七時五〇分

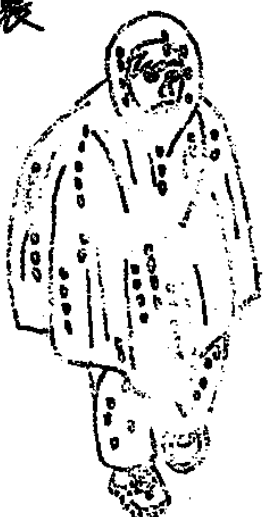
休憩。顔に汗が滲む。星空の片隅に、ハ
ッ岳連峰が見える。いったいどの位歩いたの
だろう。朝食はもう少し歩いてからにしよう。

午前九時三〇分

三回目の休憩。

さっき野辺山まで
十四キロという標

識を見た。足の裏



が痛い。牙が目にしみる。食欲がない。足を冷やしてはいけない、さあ出巻しよう。

午前二時四十分

青里の休憩所でジュースを二杯飲む。へうさい！と思わず一人言。ふとどこちついた気分だ。ここまでくれば後は急な登りはない。少しゆっくりしよう。始めて地図を出す。もう二〇キロはないだろう。さあ、もう一ふん張りだ。かゝバルぞ。

午 〇時十五分

野田山駅到着。きつかった。青里で休憩を取りすぎてしまったようだ。ペーを整えるのに苦労した。しかしほっとしたせいお腹が減った。昼食を軽くとして帰ろう。久しぶりに爽快な気分だ。いつもこんな気持ちでいられたらなあ。

(この文章は山本君の代理で書いたものです)

決意の瞬間がきた
高慢ちきな 自然の横ばらに
さどの利いた。ビート一本お見舞いよう
そこでだアズミにぶら下がる 俺の体は
ここは論理からは遠い 界の
ほうほうと風の吹き通る 異郷だ
冷たくて感じのいい 岩肌からも
お前の暮している 都からも遠い
オーバーハングの 岩の下に物体は
いわば たよりない 蜻蛉の 影だ
愛も 執着も 感動さえもない
この うつろな 空間で
俺は何をしようというのだろう
地上の世界と 結ぶついている 絆が
このたよりない 一本の 綱であることを
誰に 告げたらいいだろう

青柳 健

守門岳

千葉 興義

三日分の食料をつめ込んで大をなやッワを、車に積み終、Eのは夜も十時近かつた。走り続けて、ようやく夜明けを告げたのは、六日町あたりである。たろうが。

長岡からは会津へ抜ける道路を走り、因小温泉道に近づくころには、かなりの量の雪が残、二三日の雪が、目につきはじめてた。

一度道を間違えただけで、すんなりと田小屋敷まで来たのだが、道標が見当たらず苦勞した。ようやく道標を見つけ、雪の深山を這上る。この民家の脇に道を止める。その民家の主人に、その道を尋ねていただく。民家の主人は、その道を尋ねていただく。民家の主人は、その道を尋ねていただく。

歩み遅めはくもりがうごめく。Eが、林道を這上り、不規則な登りになる。Eは、林道を這上り、不規則な登りになる。Eは、林道を這上り、不規則な登りになる。

最初の登りは胸がきつたので、息を吐く。二時頃ほど登った後、やっぴの思いで林道の端にたどりつく。

はるがとある飯後三山、雪道は、息が面山、その他名も知らない山々が雪を重層に積し、五月晴れの空の下、静まりかえっている。はるが彼方には目指す守門岳が、真白な残雪をいまだいているのが望める。雪道の下、ここで軽い食事をとり、おかんも食べた。へこのみかんが明日、指輪がめりになることなど思えずに。秋山は、そのスノーをばき、雪をみながら、と息を吐く。息を吐く。

残雪は、一米前後で、大層、思わやん。私の三人は歩いて登って行くが、秋山はスキーにスキーをつけて登る。あんまりもぐらぐら休んだ。守門岳は近づくに見えるが、なかなか登く、ゆっくりに休みに行く。何度自分の休息の後、ようやく樹林帯を抜ける。もうあ

と一時間ぐらゐで頂上というところまで、ついに思ひやんがバテテしまつた。丁度良晴し、いい所だ。こので、紅茶をのかし、何度自分の食事をとることにする。人の気持は全くない。はるか下の者から、スキー場の音楽が聞こえるに聞えくる。途中一つのパーティに追い越されてただけだ。

再び歩き始めると、じきに三の尾に到着した。広々とした、ガスに包まれて、手すりというところだ。徐々に竹がさが立てる。頂上にはもうすぐだ。頂上直下には木をこわすレバースミをいなのがある。雪真でみち氷河みちになり、大きいやつだ。あたりはゆるやかな平原で、明日降り降りる予定の足根もよく見える。男のパーティがスキーをばいて、下山の準備をしている。

我々を追い越している。パーティは、早くも中門岳を征服したのだらう、騒然に降り降りてくる。我々も明日は太いにスキーを楽しむ

めることだろう、そう信じつつ中門岳へ一気に登りつめた。

山頂のお地蔵様に仁義をきつて、そこにテントを張らせてもらう。大層は深夜のドラインで二にえたのだらう、テントの中は早々にイビキをかきはじめた。登山、思ひやん、私の三人は、飯量増進とバツに山頂周辺で、寝て居るらしい。

明日のスキーを楽しむに、早々に寝ることにする。

翌日、麓にあたる水しぶきが覚めた。そんなはずはないと思いつつ、起き上がると、テントの内は水がたまり、シュラフの中まで水が浸み込んできている。全員ビショビショだ。ラジオをつけて不意に音を聞くが、快復の見込みはないようだ。あきらめてビショビショぬれのシュラフに入り、フテ寝する。深夜の寝不足が効いているせいかよく眠れる二時間ぐらゐ寝たり起きたり食べたりするが、

このままの状態で今夜も寝るのかと思うとぞつとするので、意を決し、下山することにする。

三の荒までは歩いて降りたが、そこからハスキーを降ろす。そろそろとボーゲンで下り、柔るときに目をつけておいた竹ぶおを、ガスの中に見つけたときには、ほっとした。右も左も分らないなか、ハスキーをつけたり歩いたりしながら、ようやく見覚えのあるところに降りて来た。ハスキーの着脱作業が何回もあつたので、かなり疲れてきている。あたりは、ガスが濃風のためにすごい速さでとんできていく。ガスのしずくが、木の枝をつたわって、風が吹くたびに雨のようになつてくる。

休んでいると体が冷えてしまうので、早々に歩き始めることにする。それに、煙草が一本もないことには、小休止しても休んだ気がしない。

しばらく歩くと、そこに見覚えのあるみか

んの段があらわれている。それが下山口だったのだ。みかんの段がなければ、ちやうど分りにくいところだ。みかんの段さん、ありがたう。そこから、私と大房はハスキーをはきし歩いて降りた。思わぬと私はハスキーをつけたまま、かなりの急坂を下りはじめた。下り始めて三十分ぐらいのところだ。深山が、大房さんがおちて止まらないうちで、先に降りていた私は、上のオを見まわすと、大房が積雪停止の姿勢で降りおちてくる。雪がくさつているのでスピードは出ないが、ピッパが初めず止まらないのだ。

あ、という間に私のハスキーの上に乗り、私も一緒にあらはじめた。約十米程おちたところで私はや々と止まった。しかし、大房はと見ると、彼はまだ落ち続け、数秒の間に見えなくなつてしまった。なんとかしなくてはと思い、立ち上がると同時に、私は再びすべりおちはじめた。傾斜が急なのと、ナイロンの

雨具をつけていたのが笑いし、今度は止まらない。アア！花の時期参もの多分かりついに消え去るのが、常子さん、おとうさん、おかあさん、よなり。と、思ったところで、やうと止めることができた。大層な雨と、はるか下五十米ぐらいのところまでようやく止まっていた。落着いては五十米ぐらいだろう。ケガは無いのだが、大層なビッケルがどこかへいつてしまった。へ今後守門岳へ行く人は、必ずビッケルを探してくることに。

アアシデントのおかげで、早く下に落ちてしまったが、体の方は一見に癒えてしまった。林道に出るころには雨も上り、道もさえもれはじめ、新郷平野さえ見えるようになってきていた。雨の島、大分雪が溶けていたが、雪をひろいながら、民家の近くまで着くことができた。

ビショぬれの衣類を着替えて、民家のおじさんに御礼を言つて、ようやく帰途についた。

ろには、夕日がさしていた。

計画では、守門岳往復ではなく、新郷へ着ける予定であったのだが、民家の島、往復となつてしまった。山スキーの醍醐味を感じることができず、残念な山行であった。



鳥海山の思い出

木村 純子

七月二十七日水曜日、午後九時十四分港の鳥海一号で、私たちは鳥海山へと向かった。今回の山行は、井上則子さんと、彼女のお父さんのNさんが計画し、それに私が便乗したのである。

二十八日六時五二分、象潟駅到着。鳥海山へ向う人の数はそれほど多くなかった。七時三十分のバスに乗り、鳥海ブルーラインを経て登山口である鐘立へ行った。駅へ着いた時には、雲一つない青空が、今は景色も見えないほどにくもっていた。

おにぎりをも一つ食べて、八時三十分出発。雨が少し降ってきたけれどそのまま行くことにした。途中、中学生の団体や参拝客の人たちに出会った。雪道を二つ越えたところから、河原で白、黄色と花が咲き乱れ、

れいなので休憩をとることにした。

御幸園舎近くで、鳥海湖を眺めて昼食をとることにした。湖のまわりには黄色のデントが積ってあった。

七五三詣へ行く道にもお花畑のように花が咲き乱れていた。二本に分かれた道の右の方を選んで、文殊岳、伏拝岳、行着岳を越え御本社へ。この登りは焼岩を登りつめた階段作りで登り易かった。まだ新しい山小屋と社。山行の無事を祈ってお参りをした。

ここまで来たのだからと、新山山頂まで登ってみることにした。しかしこの山が私たちの非常に手こずらせ、予想以上に時間をとられてしまった。巨岩の積み重なる登りで、指導係はあるものの緊張の連続。岩を一つ登るたびに体に力が入ってクタクタになった。下りは七高山側へ。ここは万年雪があった。七高山から氷の藁餅への下りがまたまた大へんでした。倉利坂というこの道は歩き石ば

かりで、まともに歩けないのです。鎖にしが
みついて滑べるように下りてきたのです。さ
っきの新山といふ倉利坂といふ、非常に急な
の激しい山です。

予定では、祓川ヒュッテへ泊まることにな
っていたので、そちらの方へ行きたかったので
が、雪が広く、はっきりした道がつかめず
Nさんが先に行って道を探したり、きどった
りしていた。あたりはだんだん暗くなってく
る。これ以上歩きまわるのは危険ということ
で、とにかく今夜泊まるのができそうな場所
を捜すことにした。やつと蘆屋小屋を見つ
けた。入口の戸ははずれてしまっていたが、中
はきちんとしてあった。ロウソクをつけ、カ
トリ線盤をたき、一晩をすごした。翌朝、入
口づれに見えた朝日はとてもすばらしかった。
午前六時小屋を出発。来たときよりも美しく
ときれいに掃除もしてきたよ。
雪をを下って行くとスキー台を置いている人

7月27日(水)		7-2844	
上野駅 9:14			
7月28日(木)		(鳥海 716-742)	
上野駅	6:52	上野駅	7:30
金沢	8:20	金沢	9:30
金沢	8:30	金沢	10:35
金沢	11:00	金沢	11:50
金沢	11:50	金沢	13:30
金沢	16:00	金沢	17:00
金沢	17:00	金沢	18:15
金沢	18:30	金沢	18:30
7月29日(金)			
金沢	4:30	金沢	6:00
金沢	7:00	金沢	8:00
金沢	8:30	金沢	8:30

がいた。雪をはずれてしばらく下って行く
と、祓川神社へ着いた。八時だった。こんなと
ころに水ばしろうが咲いていた。
無事下山はできたけれど、道がはっきりわ
からない時ほど心細いことはありませんでし
た。地図の読み方をまったくきちんと勉強しな
くてはと、強く感じた山行でした。

現役との交歓会

斎藤 正雄

十月二日、県相にて現役との交歓会が催されました。当日は天気も快晴で絶好の運動日和でした。相変らずの〇・Ｂ連の時間観念の薄さによって半分以上の遅刻の中で十時半頃行動を開始。その時は〇・Ｂ・現役合わせて三十人ばかりで、三チームの結成を試みてチームの編成も完了。あとは試合開始を待つばかりの中、さらに結々と詰めかける〇・Ｂも多く、最終的には五十人に近い盛大な会合となり、先に編成したチームを台無し解消。新たに四チームを結成しました。試合の方は和を除くと和やかに進んでおりました。三勝で優勝したのは、大用さんのいたチームかな。二勝一敗は千葉さんのいたチームだったかな。一勝二敗は新澤さんのいたチームかもしれぬ。我々チームは三敗だったよね。ゲーム中は必死で

ち、終わればカラリとするのが私の良い所で、すぐ忘れてしまうのです。

ソフトボールのあとは中庭でお菓子を食べながら自己紹介。最初のうちは軽いアドリブなどを入れながら紹介してくれるのですが、進むにつれて自分の名前と期だけになってしましました。〇・Ｂと現役の断絶の進むとWVであるから、モットと名と顔を印象づけられるようにして貰いたかった。諏訪部さん、〇・Ｂ会の説明の後、現役と〇・Ｂがそれぞれ歌を歌い、最後に有藤君が池に落ちたて敬会。大用さん、泉さん、山口さんあの時の恨みは忘れませんぞ。こんな風で交歓会は終了しました。

この交歓会は現役連絡員として今までほとんど活躍していなかった私の面目を保つ為に切羽詰まって企画したものでした。その為に色々と不備な面が目立ちました。確かに〇・Ｂ会と現役との交歓にはなったかもしれませんが

しかしのB会員と現役部長との交歓がなさか
たでしようか。〇B会員である貴方は現在現
役部長の内、一人でも名前と顔を知り出せる
でしようか。現役の部長が誰だか知っている
でしようか。個人的な交際が薄くなっている
現在、もっと個人同志のふれあひがなされる
よう演出すべきでした。ここ二三年現役との
交歓会は必然性を持っています。つまり交歓
会を開かなければ〇B会の存在が忘れられて
しまうという。交歓会が〇Bと現役との交際
の一つの余興になり下がる事が大切だと思ひ
ます。

付けておくと、O.B.・現役との間で名前が解
つて便利です。



晩秋の北アルプス

有藤 正雄

五月信宿以来、山から遠ざかってゐたので山が荒しくてしようがなかった。十一月に雪校祭で一週間程休校になつたので、江成を誘つて北アルプスを目差した。晩秋の北アルプスは冬山の厳しさを新ためて教えてくれた。

十一月十九日、深夜のアルプス云々は、我々二人を松本に帰るためハ王子を出発した。

夜行の中で眠るのは相変わらず難しい。松本からはタクシーに乗った。タクシーは沢渡までとの事。沢渡からは舗装された道路を歩く。カッパ橋で昼食。誰もいないカッパ橋なんて初めてだ。今年は雪が少なくて、徳天園では小屋の屋根に少し残つてゐる他は全然見えな。梓川も涸れてゐる。これにはまいつた。大嶺山の方に十分も行くと沢に出会うが、この沢も時期がもつと遅ければ涸れるかもしれ

ない。

十一月二十一日。星の輝いてゐる中、長堀屋根を登る。所々の赤布がルートを示してくれるが、暗い所だけに間違ひ易い。長堀山への途中で夜明けをむかえる。穂高連峰が真赤に燃えてゐる。長堀山までは長かった。もう通り過ぎてしまつたのではと思ひながら到着。

蝶ヶ岳まではあと一息。蝶ヶ岳ヒュッテは冬期解放されていなかった。蝶ヶ岳からの展望は抜群である。槍ヶ岳と穂高を同時に眺めるのははじめてだ。常念までは急な登りが遠々と続く。あそこが頂上か、あそこが頂上かと上を見ながら登って行くうちに祠のある頂上に到着。頂上から常念小屋が見下せる。常念小屋は冬期解放されてゐた。

十一月二十三日。早朝、目が覚めて戸を開けてみると吹雪であつた。今日は停滞と決めてから、一緒に泊まつた人に大天荘が開放されてゐると聞く。大天荘までなうば今日中に

やでも着けると懸け出た。吹雪の降アイゼンもつけずに登りだす。横通岳への登りはブツブツでラッセルに苦しむ。道はたいして危険な所もない。雪が新しいのでルートもかなりはつきりしている。東天井岳と大天井岳との間にブロックで囲まれたビバーク適地があった。大天荘の中は真暗である。今日一日で雪に対する大きな自信がついた。吹雪いていてもたいしたことはない。しかし、この自信は翌日には見事に崩されてしまった。

十一月十三日 今日も吹雪。大天荘から大天井岳はすぐである。大天井岳からは切れ落ちた道が続いている。この道が後で解かった事だが冬ルートなのである。アイゼンを着ければ行けると思ったが、江成は風が強いと他のルートを主張。他にはルートなんかないと思えたが、戻ってあらためて探すと大天井岳をまわっている夏ルートが見つかった。しかし、このルートを取ったのが最大の失敗であった。

山頂を歩くときは山のだが四郎は雪の塊溜りになっていてラッセルが大変である。頭の上まで積もった雪をピッケルで削しながら歩く。死ぬ鬼いで東鎌尾根に出る。これで一安心と思ったが、ここからが新ためて大変であった。特に危険な所はないのだが、ラッセルには苦しむ。ルートには迷う。レリーフも蛙岩もわからぬ。後どれだけ歩くのか。三時になったらビバークの準備にかかるうと思ひながら歩いてみると、燕山荘がひっそりと現れた。あの時ほど山小屋をありがたく思った事はない。

十一月十五日。昨日までの吹雪が嘘みたいな夜明けの中でシヤッターを押す。ここからは東面を歩くので風もなく暑くて汗びっしょりだ。昨日登った人のラッセルの跡があつてルートははつきりしている。ラッセルも比較的集である。雪がクツシヨンになって膝が笑うのを防いでくれる。雪が新しいので滑って転

こともない。中房温泉に到着したら有明荘に
まわってタクシーを呼んで貰う。今年は橋の修
理のため信濃坂までしかタクシーは入れない
そうだ。信濃坂までの林道の途中で野猿の群
が我々の山行の成功を祝福してくれた。

ストイックに徹し得なかった

元浪人生の言い訳

増田 義昭

ようやく大学受験から開放されました。昨
年は浪人のムセに生活費にもの多金に入金し
ました。外との先輩者と出会うことができ、
ドバイスをしてもらって、この厄介
な事をほんとに切り抜けることができました。
僕は定例会にはは行かず、に出席しまし
た。只、二月の定例会だけは出席した。た
のびろろと来てすぐに帰ってしまっただけで
すが……。それにしてもこの一年、僕にとっ

て定例会に出ることは大変な事でした。
というのも、予備校という所は特に夜更けに出
来るという訳でもなく、言葉を交す人という
のが極めて少数の人に限定されているので
す。その上、要式的練習が次々に行われます。
それにより成績が更に上がるので気持ちを落
ちたのです。そのストレスを解消してくれま
す。その多金だったのです。先輩方の多くは下
宿を確保してしまっている。で、浪生との見聞を
理解してくれています。山の語だけではなく
ありゆる方面の話をすることば、大変面白に
なりました。ことに、勉強のほかに大学の話
は僕の学習にヒントを与えてくれるものでし
た。金に余裕があるということは精神的におい
て、学習面においても多くのメリットがあ
ったとつくづく感じています。

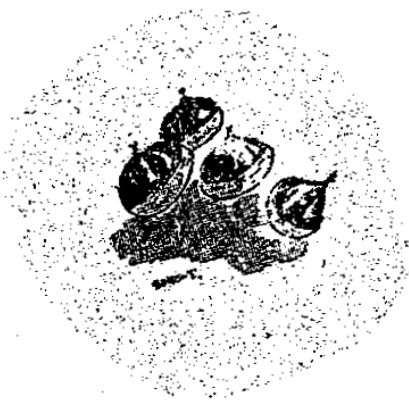
あつちの受験の事を暗うして定例会に参
加することば、結果した訳ではありせん。山
行などは、行かぬものには違いない。毎

しました。喜合留の奥森父、金峰山周辺の山行はつと会入会後初めこの山行でした。天気がよく素晴らしい登山でした。七月は個人で不意に登山しました。八月は会で南アフリカの甲斐駒ヶ岳に奥戸尾根から登りました。登山には必ずハードでしたが、又しんどい大きな山に登ったという満足感を感じたことが出来ました。十月、福島は二本松市、東北の紅葉した山並を思いつつ名物の提灯祭りを見物に。十二月は忘年会の月、二山にも当然参加。僕と同様浪人中のK君を参加し、一緒に楽しく飲み、食い、歌いました。まあ、平均二月に一度は大はしゃぎをしていたようです。

OB会に入っただけからといって勉強が遅れてしまったりしたことはありませんでした。かえって二山が学習のための刺激剤となったとさえ言えます。何も浪人しているからといって、ストイックになつて受験のための勉強一

本筋に突き進むことばないと思います。浪人生活にいつか受験勉強と同じように大切なものがあつた他にもあるのではないかと思います。好きなものは好きなものとしてどんなにいい、その中から得るものがあるならばそれは素晴らしいことではないか、と浪人中のOB会に入つて感じました。

受験が終つた今、浪人中の僕が気持ちよく元を返してくつたOB会の先輩方に感謝しております。



晩夏の上高地―蝶草念六と并倉―

小沢 聡・新津 正己

南アルプスの金山縦走を終えた私のところに蝶から槍へ行く計画が入って来たのは、もう12月も終わりの頃だった。

メンバーは私と新津さんと会長夫婦である。この新婚一年も経ていない若夫婦は行きの夜行列車においても若さ以上のものを見せてくれた。ここに書けなくて残念ですが。

九月二日早朝、上高地へとタクシーは走る。上高地・山に登って六坪目にして来る機会に恵まれた。やはり風光明媚な観光地であろう。徳栄は特に気に入った場所だ。ここに入ると一日何をしようとも十分満足できそうに気がする。徳栄から長崎屋根に取り付き、長い森林帯を抜け出したところに赤い蝶々がヒョコ

はあった。(聡)

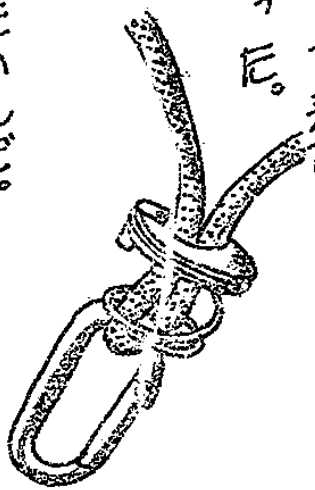
小沢くん、あの色は日本色彩研究所ではNo.47 紫色と呼んでいます。ふり向けば槍・穂の眺めの素晴らしさ……。小沢くんのジョークに圧倒され疲れ気味の彼々に一服の清涼剤のようであった。小石のバラつく道をヒョコへと向う。今夜の宿である。スワベさんが手際よく小屋の人とやりとりをしている面、寝りの三人は足を投げ出し、糸のきれた徳嶋のようにおぼろけとしていた。三人のおもりに疲れたのか、さすがのスワベさんも頭痛を訴えお床入り。夕霧吹きあぶる戸外へ出た。ひものゆるんだ靴の中で疲れた足が這んでいる。気持ちいい。へたはオカリナ音も何処へ。

三日朝天気。雨男の俺にしてはまあまあ。蝶の登りじゃ陽がさして、天気奴、俺をからかっているのど置うん？ 地図をひろぐ。峰を差し、谷をのぞき、駒を眺めます。昼食

です。あっちの岩。こっちの岩と腹を叩いた
パンの上にキュウリがツナが付けれ、いちば
ん楽しい時です。これらの半分近くは千秋さ
んの口から中へ着えていきました。常念岳の
登りは平気だったけれど、下り、もっとも苦
手な下り、ずっと下まで見える岩ころばかり
の下り、いやだいやだ。でも、そこに待ち受
けていた常念小屋。道松、名も知らぬ喬木、
いくらかの草の緑を従えてこれこそ山小屋。
赤い屋根、イーハトーヴの赤い屋根(無関係)。そ
して二階大天井へ。途中、ココアなんか飲み后
から、カンバ、カンバ。でも、やはり雨、東
大天井をまよめる頃はリンドウも我々も霧雨に
濡れてシッパリ。やって来ました大天井荘。中
は山小屋にしてはきれいだし、食事もター。
でもほせか小屋番のお兄さんへそういふにも
出にお兄さんし愛想よすぎて嫌味。我々の反
感をかう。蚕棚の増場所に入る頃は外は大雨。
雷ひかり、低い天井に頭をいやという程ぶつ

けて、苦笑い。(正己)

九月四日、大天井荘を出て槍ヶ岳へ向う。喜
作新道はとても歩きやすい。赤岩岳付近で雨
がバラついたが西岳に着いた頃には止んでい
た。水俣系越でしにした。紅茶を入れてパン
をかじった。東嶺尾根も数ヶ所のハシゴが、
鎖場があるだけで危険ではなかった。槍ヶ岳
は霧に隠れて頂上は見えないが北嶺尾根が独
標まで見えている。槍の肩に着いた時にはも
う昼になっていた。三人が頂上に行かないと
いうので一人で登って来た。
が、何も見えなかった。
下って槍ヶ岳山荘
に入ると三人は
ラーメンを食った
と言うので、私もたのんだ。
スワベさんの話によると、ここのラーメンは
一番うまい。とほる。ほるほるイニスタント



を高いところではある。

槍をさすり、槍をロッキンを目差します。千秋さんは風呂に入れると聞いて大喜び。(鳴)

途中、お花畑でカメラに向くとさっき小沢くんに叱けらうたを事もなげにニッコリ。斎藤いや藤の出る立寄所の前を過ぎ戻る道に過ぎ、ロッキンへ。入浴は適度で疲れどやすらぎを耳えてくれて、ぐっすり睡眠……と言ふところだけれは千秋さんほふどんにちどつてからは、いりで驚りの人から警告する。そのあと怪、小沢は警告をもうきい接されました。

五日はもう下るだけ、藤やさんほんで、スニーカーにショートパンツ。横道から橋を渡へど、津川の流れとともに上高進入。明後日は白雲を浮かべた雲道を背に、横道は最後の夏空を構えて、我々四人に別れを惜しんでくれに、お疲れ様。(正己)

(正己) コースタイムを知りたい人は小沢くまで連絡を。

雑感

高城 竜

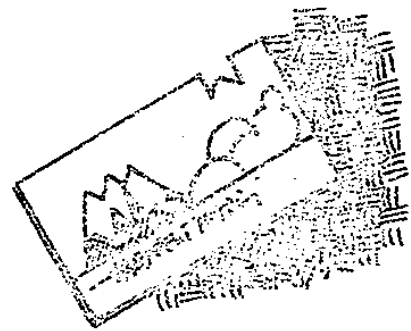
雑感そのワ

夜行列車

その夜はじめても寝苦しかった。国いすにやがてしい橋の窓。それでも昨日の夜水の橋が一時をぼろろむことができた。鉄道を渡る直前に急降していく列車。軌道をきき、ヤグをかつぐ。扉が開く、夜の冷気が頬を刺す。三時五十分、茅野駅。

ホームには二三十人の登山客のへまが改札口に向っている。その流れを乱す一瞬。先頭を登山客が率い、それに江成氏、彼と続く。駅舎の暗い角に身を隠し、貨物の車を通り抜け、国鉄が得意とする枕木とバラ線の短線のスキ間から抜け出す。目の前は真暗なバス乗り場。しばらくその暗がりに、右手はいかに

と身を潜め、百円の自動販売機で紅茶をすする。ベンチに腰かけ、各自おリットからキツプを出す。ル王子から乗った電車はアルフス几号。手もとの切符は額面千二百円の普通乗車券だけ。否、秋山氏はそれすらも持っていないから。国鉄は今日も赤恥。



●雑感その8

初夏夏

また行って来たよ是様に
何の因果かメンバーは同じ
さっき嫌さん貰った小幡先生と可愛いい子分達
ドタ蹴に悪いガックだけが山じゃ無い
草しか生え無い原っぱの
知的にして優雅なる静かな
木道にゆきパツて行く
銀河の星

蠟燭の明りに琥珀に光る
寿の水

心に残るぬくもり……
初夏の夏

アト何耳ツツワカナ
子供達も近頃タモシネ

●雑感その9

五月

朝の花がぐわしき春うらら。黒瀬氏の標本の
芝地でまじり出るあざくろしい草花。生物室
横の窓やら何やら引きずり出しているオバさん。
こんど世界景（好景）は何か（た）が彼の
目に止った。彼の生物学的解読結構あるところこ
ろの好奇心が、ある好奇心（実験的）の結果を
意識し（ない行動）が（感動）だった。

昭和十七年九月に高城亮。

秀水を知りたか。に新一氏先生。国鉄入部



越後の山

高城 亮

越後にはあまり高い山はないんだけど、山が深くて、険しくて、雪が多いんで、えらくごつく感じる。我はまだ初冬と正月にしか行ったことが無いもんで、新しい事ゆかんはいんだけど、我が頭に残る強烈なる印象は新雪と紅葉に萌える山寂へ紅白でめでたいのいすし。大岩壁をばべらしたおっちは桑谷ハイナがたくさんいます。稜線でも四五メートル以上も積もる湿った雪。そして、体温をむしりとる烈風いす。

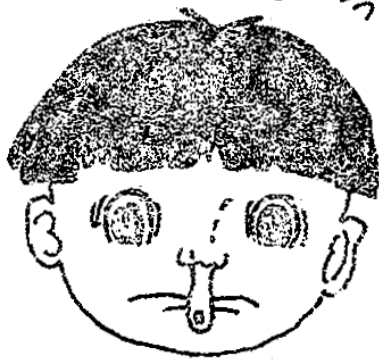
昭和五年正月。曉山荘会は越後駒ヶ岳、中ノ岳で正月合宿を行いました。この山荘会は日本山岳協会の公認指導員である山本芳夫氏が会長

を務め、会員約四十名。創立は〇日会と同じで、今年十周年を迎える。やはり、密着年表には勝てぬとみえて結婚、職場の都合で退会、休会の会員もいて、主に活動している会員は十余名であるが、四十を越えた山本氏をはじめ、四十以上の大沼氏、奥田寛ローツ登山隊の江藤氏、相山協会の富士登山や三ツ峠岩登り講習会に参加された方なら誰でも知っているであろう山下の矢島氏等々、強力で心強いメンバーで構成され——おっと忘れていた、曉いや〇日会のホーフ高城君もいる——ている。また、山行は休んではいるが、合宿や宴会の援助やら、非常時の救援にと頼もしい面々が名を連らねている。〇日会もそろそろ、非常時の為の体制を確立すべきではないか。

山行は個人、会を問わず、山行前に届け出る。無届山行は除名等の厳しい措置が待っている。山行内容が高嶺である為、それに臨む態度考え方はまじめであり、厳格である。壁

登り始めにはるかに高度の技術を有する山岳
会は他にいくらかもあるが、山に対するこの
精神は、どこと比べたとしても恥おかしうは
いと思ふし、羨望した甲斐もあるのれす。

ところで合宿の話だけど、今年は例年に比べ、
雪積が少なく、前年のように胸や膝までもぐ
るラッセルはなく、せいぜい股位で拍子ぬけ
る。拍子がぬけたのはいいのだけれど、悪い
ことに、今年は雨や霰に降られタフツ。そ
れにラッセルがひでえんだ。雪面がボケナス
で、足を乗せて踏み込むとホカッと思えらま
うんだぜ。わかる。ズツゴク疲れるのら。雨
降る位だから暑くて、小倉尾根じゃラクター
枚(上げけ)で大汗かいて登っ
ただけど、やはり中ノ岳の
稜線は寒くてほっぺが氷りつ
いて、一週日程、左のほっぺ
がおかしかったら笑しかった



のぞきはいし。にせ小倉の前で八人用のカマ
ボコテントを設営。夜はやはり寂しすぎる。
駒の小屋で年を越す。前年はニメートル掘っ
て窓から小屋に入っただけけれど、今年は窓が出
ていた。

四時起床、七時出発。大岩、山崎、矢島、
我の四人が中ノ岳へレストン、雪、一時強風
の中、檜廊下の懸場を越え、雪はや雪面の亀
裂に注意し、ヒキまでもぐれば、クラストし
た雪もあるので勉強にはったのら。時々、無
線で交信したり、ハミリ撮ったりして、昼前
に中ノ岳登頂。山岳信仰が盛んはだけあり、
山頂には石塔がある。小屋は雪の下で見えな
い。

帰り道、ホッペが氷る。駒山頂の銅像にも
ついでに再会して駒の小屋に十六時帰着。
小屋の釣り鐘をかんかん鳴らし無事を祝う。
夜、袖網を作り、正月料理が盛られ、山行
中祭酒の鉄則のたき一つの例外であるお神酒

がちらりぴり注がれる。正月じゃ。正月じゃ。

二日。後巻の二名が小屋に着く。八名全員で快晴の駒ヶ岳山頂を踏む。小屋に戻り、薄雲りの中、小倉山に降る。トレースがあるので二時間程で着く。幕営。我は二時間かけて大きな雪洞を掘る。

最後の夜。近くに他のテントが無いのを幸いに、二十三時まで騒ぐ。スルメにカマボコ、慣れればおいしいクサヤの干物をつまみに、お茶で酔っぱらう。皆さん本当に歌が上手で色々に狂歌が入っていらっしゃる。満天の星と里の灯に小キズを飛ばすムスコも元気元気。

我一人、雪洞にて夜を明かす。ローソク一本で明るく、美しい。でも一人だとやはり寒いです。

三日。本格的に降り始めた雪の中、アイゼンとワカンの併用で下山。でこぼこに固まった雪の上に新雪が積もり、ぶつぐく歩きにくか

ったのう。ターガルルルッ。

会長さんにいただいたカゼの爲、翌日から寝込む。

⑧ WRITTEN BY RYO



初めての山行(編集後記)

花を咲かせたいと思います

誰もがそれを望み

美しい開花を待っています

でも

手を汚し、土をぶち

種をまく人はいない

青い芽が出て、つぼみがふくらむと

誰もがのぞきこみ

今か今かと楽しみに水を差してくれる

いつもいつも

そんな花の咲かせ方しかできない

誰もが自己表現が下手で

不器用なんだ

でも

花を、山を、自然を愛する心を持っている人

冷たい谷川の水に、こから手を投げ出し

食器を洗った

初めての山行を思い出そう

山岳文集 やまづ 第9号
— 10周年特集 —

1978年 4月 2日 発行

発行所: S.W.V.O.B.会

代表 諏訪部 信一

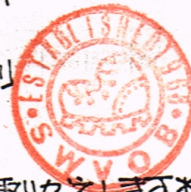
発行所: S.W.V.O.B.会

やまづ編集委員会

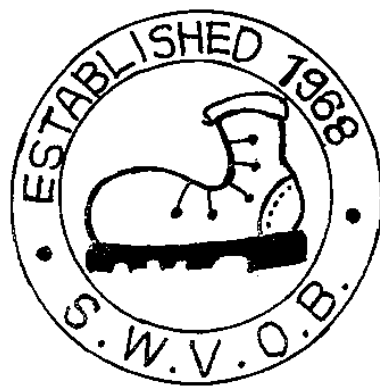
相模原市

印刷所: (表紙)

山崎印刷



* 落し 汚しの際 お取替えします *



APL. 1978